

LipoTEST を活用した症例発表が学会賞を受賞しました。
日本獣医内科学アカデミー/日本獣医臨床病理学会
学会賞受賞：JCVIM/JSVCP 症例 Award 2009

脂質代謝異常を起こした先天性胆管奇形の猫の一例

○日野原 佐和子¹⁾, 鳥巢 至道²⁾, 水谷尚³⁾, 荒井延明⁴⁾ 鷺巢 誠²⁾

1) 日本獣医生命科学大学 附属動物医療センター 2) 日本獣医生命科学大学 獣医高度医療学教室

3) 日本獣医生命科学大学 獣医内科学教室 4) スペクトラム ラボ ジャパン株式会社

【緒言】今回我々は肝酵素上昇、腹部膨満、食欲不振を主訴に来院し、高脂血症と胆管奇形および化膿性胆管肝炎を呈した若齢のネコに遭遇し、脂質代謝改善薬を用いたところ良好に改善したので報告する。

【症例】シンガプーラ、1歳1ヶ月、去勢雄、体重 2.42kg、BCS3/5。約3カ月に及ぶ食欲不振と活動性低下および肝酵素の上昇を主訴に精査のため本学動物医療センターを受診した。身体検査所見では腹部膨満と意識レベルの低下が認められ、血液検査所見では肝酵素の上昇およびTGの異常な高値(729mg/dL:正常0~110)が認められた。超音波検査では肝腫大、胆嚢・胆管の奇形と思われる拡張と蛇行所見、胆泥と胆石の貯留が認められた。腹部膨満の原因は肝腫大によるものと考えられ、脂質代謝異常を鑑別診断の上位に入れ、まずLipoTESTを行った。LipoTESTの結果ではVLDL中性脂肪(594mg/dl:正常0~63)とVLDLコレステロール(52mg/dL:正常0~5)の異常な高値がみられる複合型の高VLDL血症が認められたことから脂質代謝異常が確認された。この結果から脂肪肝の可能性が示唆され、肝臓の針吸引生検を実施した。肝臓の針吸引生検では肝細胞の腫大と桿菌が多数認められ、化膿性胆管肝炎が疑われた。脂質代謝改善薬であるクリノフィブラート(プリンメート:5mg/kg/BID)と抗生剤を1週間投薬した結果、VLDL中性脂肪は急激に正常化(55mg/dl)し、VLDLコレステロール(6.7mg/dL)の低下がみられ、TGと肝酵素の値は正常範囲内に改善した。それに伴い食欲と活動性も回復し、腹部膨満が著明に改善し肝臓サイズの縮小が起こった。血液検査や臨床症状は著明に改善したが、化膿性胆管肝炎と胆管系奇形の疑いがあったため、追加検査として腹腔鏡下での肝生検と胆汁穿刺による培養検査を実施した。胆管系の奇形がみとめられ、採取した胆汁から多剤耐性の大腸菌が分離されたが、使用していた抗生剤に感受性はなかった。肝臓病理検査では慢性化膿性胆管肝炎と診断された。現在感受性のある抗生物質を投与しながら経過観察中である。

【考察】本症例は肝酵素上昇に伴う高脂血症の診断をLipoTESTで行い、高VLDL血症という結果を得たことから、適切な脂質代謝改善薬を選択し用いることで、重度な肝腫大、活動性の低下、血液性状が著明に改善された。肝臓の組織生検を実施する前から、肝腫大の改善と一般状態の良化が見られたため、臨床症状には高VLDL血症が密接に関連していたと考えられる。また若齢の先天性胆管系奇形を持つ猫であるため、LPL欠損やアポタンパクの異常など先天性高脂血症を複合させる可能性は高いと考えられる。先天性に発生する高脂血症はシェルティーの高コレステロール血症、ミニチュアシュнауザーの高中性脂肪血症、猫の特発性高カイロミクロン血症、猫のリポタンパク質リパーゼ欠損症などが知られている。このことから肝疾患に伴う高脂血症の症例には、脂質代謝異常も考慮し、モニタリングとしてLipoTESTを実施することで、肝疾患の治療に役立つと考えられた。

